

一方、平成 27 年（2015 年）に琵琶湖保全再生法が成立し、県は法第 3 条による法定計画である琵琶湖保全再生計画を策定し、平成 29 年（2017 年）以来、琵琶湖の保全に関わる施策の計画が並立することとなりました。

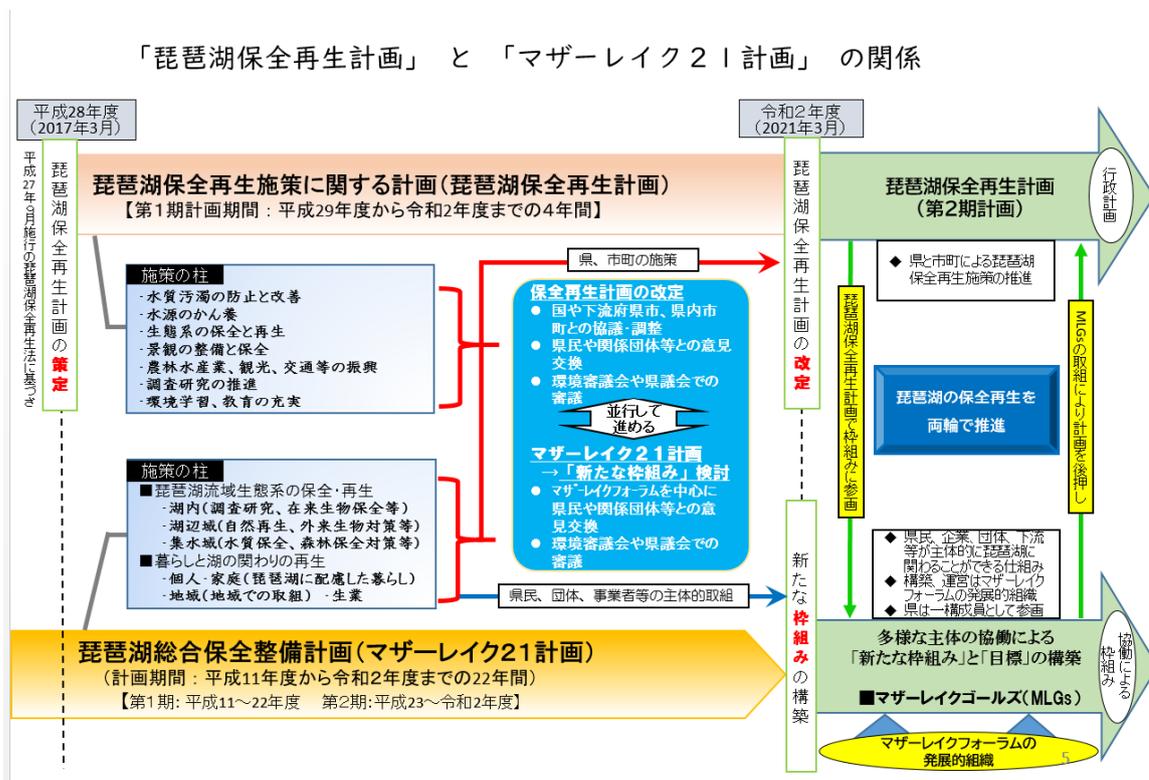


図 91 「琵琶湖保全再生計画」と「マザーレイク 21 計画」の関係（再掲）

令和 2 年度（2020 年度）に、琵琶湖保全再生計画の第 1 期とマザーレイク 21 計画の計画期間が終期を迎えるのを機に、行政の施策については琵琶湖保全再生計画に一元化します。

琵琶湖保全再生計画には、環境を「守る」取組により、地域資源の価値や魅力を高めるとともに、それらを「活かす」ことで、経済・社会活動の活性化を図り、さらなる「守る」取組へとつながる循環を持続的に実現していく新たな視点を盛り込んでいます。これまでマザーレイク 21 計画に位置付けられていた各種の施策については、琵琶湖保全再生計画に基づく取組の中で継承していきます。

マザーレイクフォーラムをはじめとして協働で取り組んできた、県民、事業者の皆さんの主体的な取組については、一定の成果が見られたものの、そうした成果を行政施策に反映させることが限定的であったこと、参加の裾野の拡大が不十分であったこと、地域活動との連携や展開が不十分であったことなどの課題がありました（詳細は 4.6.3 (2)）。

このことから、従来の、行政計画に多様な主体の皆さんが参画するというやり方から一歩踏み出し、計画という形にとらわれない新たな仕組みを作ることが必要と考え、マザーレイクフォーラム運営委員会と県とで議論を重ねてきました。その中

で生まれたのが、「琵琶湖版 SDGs=マザーレイクゴールズ (MLGs)」です。

5.2.2 マザーレイクゴールズ (MLGs)

(1) マザーレイクゴールズ (MLGs) が受け継ぐ精神

琵琶湖総合開発以来の琵琶湖保全の取組を概観すると、行政と県民、NPO、事業者、企業等の多様な主体との協働が背骨となっていることが分かります。石けん運動、びわ湖ABC作戦、流域協議会そしてマザーレイクフォーラムと、琵琶湖に関わる人々の思いと自主的な取組が、琵琶湖を預かる滋賀県を特徴づけています。

マザーレイクゴールズ (MLGs) は、その協働の精神を受け継ぎ、多様な主体の皆さんが琵琶湖の保全・再生に向け、主体的に自分たちが出来ることで参画できる仕組みの中心に位置付けられます。



図 92 MLGs への参画のイメージ (再掲)

マザーレイクゴールズを中心に据え、各主体は自らが関わるゴールに「コミットメント (びわ湖との約束)」をすることにより、琵琶湖への積極的な関わりを目に見える形、見える化して推進していくこととなります。

(2) マザーレイクゴールズ (MLGs) とSDGs

マザーレイクゴールズは琵琶湖版の SDGs として、2030 年に向けて、滋賀県独自のゴールを設定するものです。

SDGs は、世界規模の目標ですので、日本で、そして滋賀県での活動においては、自分からは随分遠いことのように感じて、身近に感じないところもあると思います。

そこで、より多くの多様な主体が SDGs をより自分ごととして捉えられるよう、SDGs と地域・現場の取組との間に置かれる滋賀県なりの目標が MLGs です。

いわば、琵琶湖を通じて SDGs をアクションまで落とし込む仕組みが、MLGs であ

り、琵琶湖を通じて自分たちの活動がSDGsにつながっていることを発見する仕組みであるとも言えます。

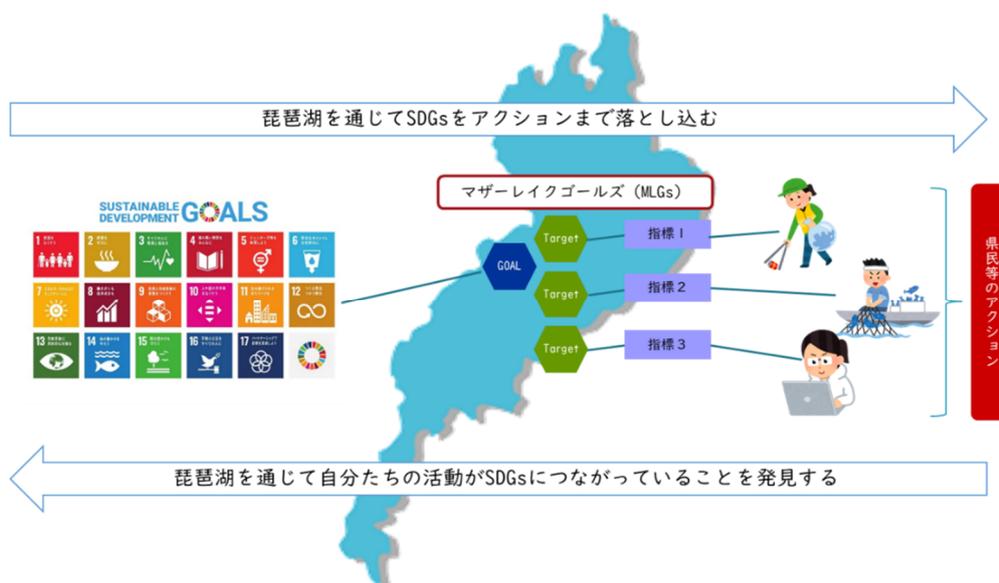


図 93 MLGs と SDGs

(3) マザーレイクゴールズ (MLGs) の策定と県の役割

マザーレイクゴールズ (MLGs) は、マザーレイクフォーラム 10 年の活動の集大成としてマザーレイクフォーラム運営委員会が起草し、次世代へ引き継ぎます。令和 3 年 (2021 年) 7 月 1 日 (びわ湖の日 40 周年) を機に、広く県民の賛同を得て策定したいと考えています。

県はマザーレイクゴールズ達成に向けた取組を進める多様な主体の一員であるとともに、組織の運営や、策定後の指標のとりまとめなどで、取組全体を下支えします。

(4) マザーレイクゴールズ (MLGs) の達成に向かう状態

マザーレイクゴールズ (MLGs) を達成するためには、琵琶湖保全に関わる個人・団体間のフラットでオープンなつながりのもと、地域における多様な活動が自発的に創出される状態 (創発) が必要です。

創発の状態は、多様な植物とそれを取り巻く環境に喩えることができます。

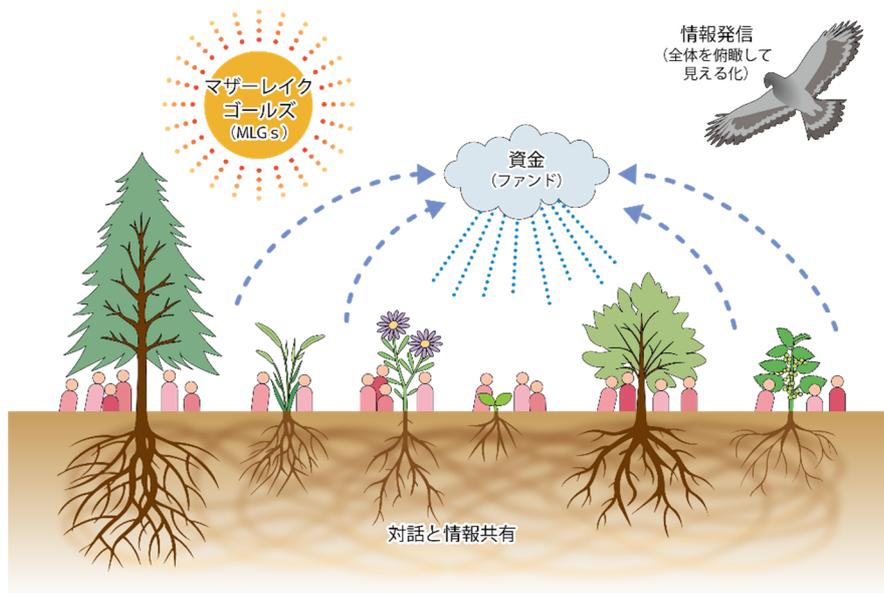


図 94 MLGs の達成に向かう状態のイメージ図

図 94 中、多様な植物は、NPO、事業者、企業、行政など多様な主体による活動を喩えています。大きい木もあれば小さい草花もあり、それぞれの主体がそれぞれの形で活動し成長していくイメージです。

この多様な植物群、多様な活動をはぐくむために必要なものとして、光・太陽があります。これがマザーレイクゴールズ (MLGs) であり、活動の大きな方向性を示す共通の目標となります。多くの植物が光を求めて天に伸びるように、多様な主体がそれぞれの形でマザーレイクゴールズ (MLGs) の達成に向かっていくイメージです。県も、この植物の一つとして、琵琶湖保全再生計画等、県の施策により取組を進めていきます。

植物群が成長するため不可欠な要素である土壌に喩えられるのが活動間の対話と情報共有です。植物と同様、多くの活動も単独で存在できるものではなく、ほかの多くの活動・取組と関わり、つながりながら成長していきます。

植物群が成長するために必要なものとして水・水循環があり、これは、環境保全活動に関わる資金の循環に喩えることができます。活動資金については、現在のマザーレイクフォーラムにおいても寄付金を受け、独自の活動を実施していますが、十分なものではありません。現在、SDGs に向かう社会の中で ESG 投資などが注目されているところであり、環境保全活動に係る資金循環をどう作り上げていくかについては、今後の検討事項です。

最後の要素として、鳥の目があります。これは、情報を収集し、客観的に状況を評価する視点の比喻です。琵琶湖とそれを取り巻く暮らしに係る指標をチェックし、学術的知見に基づき琵琶湖の状況を客観的に評価する役割、そして地域におけるマザーレイクゴールズ (MLGs) 達成に向けた様々な活動を取材・情報収集し、情報発信する役割を喩えています。

5.2.3 今後の県の取組

県は、多様な主体の皆さんとの協働を基盤としたマザーレイクゴールズ（MLGs）のもとで、マザーレイク 21 計画で培った琵琶湖の保全再生の取組を更に発展的に継承し、進めていきます。

「マザーレイク 21 の今後に向けて」

京都大学大学院工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター教授 清水 芳久

2015年9月、150人を超える世界のリーダーがニューヨークの国連本部で開かれた「国連持続可能な開発サミット」に参集した。ミレニアム開発目標（MDGs）の成果をさらに一歩進め、新しい持続可能な開発アジェンダを正式に採択した。この歴史的な国連サミットで採択した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に掲げられた「持続可能な開発目標（SDGs）」は、2016年1月1日に正式に発効された。2030年までの15年の間に、各国はその力を結集し、あらゆる形態の貧困に終止符を打ち、不平等と闘い、気候変動に対処しながら、誰も置き去りにしないことを確保するための取り組みを進めてゆくことになる。SDGsでは、持続可能な開発を達成するために、経済成長、社会的包摂、環境保護という3つの主要素を調和させることを必要不可欠であるとしている。すべての人に普遍的に適用される新たな17の目標とこれらに紐付けられた169のターゲットに基づいて推進していくことになる。SDGsは、現在と将来の世界が抱える問題をこれらの多くの目標とターゲットに還元することによって、様々なレベルで効率よく実行しやすいシステムとなっている。

SDGsの目標達成のやり方については細かいルールは存在せず、やりやすい様に実施するように国、組織や個人に任されている。定期的に進捗レビューを実施するようである。このレビューの際には、まず、各ターゲットの達成状況を数値化することから始まる。一方、それぞれの数値の背景には数値だけでは表現することが困難な多くの「ストーリー」がある。達成した数値だけでは見えてこない、見ることができない現実を受け止める必要がある。目標達成の経緯や形を語ってくれる個々のストーリーに耳を傾け、目を開くことが可能なレビューシステムを考究する必要がある。このシステムは、同時に多分野の異なる価値情報を統合することができるものでなければならない。現状ではバラバラに入力・管理されがちな数値データを積み上げ、数値データから次世代に必要な組織や効果的な活用システムを構築し、数値データとストーリーデータそして価値データへと進化させさらに統合し、その上で将来を予測できるものでなければならない。糸を紡ぎ、縦と横の両方の糸を編み込み、それらをうまく着こなすことが必要となってくる。

人によって関心のある分野は様々であり、「ゆたかさ」や「しあわせ」の意味や捉え方もそれぞれ異なるのは当然である。個人とその個人が属する集合体との間でも違ってくる。「共感」をどう考えるか？多くの人々が共感を共有するためには、やはりストーリーが必要になる。人々の時空間的な活動や情報の範囲が比較的狭かった時代には、ストーリーの共有とその先に生じる共感は今よりも比較的簡単に実感できたのだと思う。現代さらに将来は時空間の範囲がより広くそして深くなることにより共感を持つことは更に大変になるが、やらなければならない。予測しなかったことが発生した場合にもそれに適切に対処して毎日の生活を続けるためには、SDGsが掲げている「社会、経済、環境のバランス」は当然重要である。これと

同時に「心の余裕」が大きくものを言ってくるように思う。この余裕を保つためには、過去、現在、未来を繋げるより正しい予測対応システムが必要不可欠となる。

今こそ、この確立に向けて模索と検討をしていく出発点としなければならない。たとえ困難に感じられても、個々の目標達成のためのストーリーから流域の縦横の統合へ向かうための作業とシステム構築のために動き出すことが統合的に流域を管理することへと続いているはずだから。

参考文献

- 滋賀県「滋賀県環境白書」昭和 48 年版～平成 10 年版
- 滋賀県「琵琶湖総合開発事業 25 年のあゆみ」平成 9 年 8 月
- 滋賀県「『マザーレイク 21 計画』～琵琶湖総合保全整備計画～」平成 12 年 3 月
- 琵琶湖水質保全対策行動計画推進協議会「琵琶湖水質保全行動計画の概要 琵琶湖とひととの夢行動【中間年度版】」平成 15 年 3 月
- 滋賀県「琵琶湖総合保全整備計画(マザーレイク 21 計画)＜第 2 期改定版＞」平成 24 年 3 月

琵琶湖総合保全整備計画（マザーレイク 21 計画）
＜第 2 期改定版＞
ふりかえり報告書

発行：令和 3 年（2021 年） 3 月

発行者：滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課

〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目 1 - 1

TEL：(077) 528-3466

FAX：(077) 528-4847

e-mail dk00@pref.shiga.lg.jp

